



# 30<sup>th</sup>

**Anniversary**

釧路公立大学 1988-2017

**開学30周年記念誌**

Koshiro Public University of Economics  
The 30th Anniversary Memorial Booklet

## 建学の理念

- ◆ 地域に結びつき開かれた大学
- ◆ 国際性を重視する大学
- ◆ 理論と実践の相まった大学

### 釧路公立大学 開学30周年記念誌

## 目 次

P1	目次/建学の理念
P2	釧路公立大学校歌
P3	管理者挨拶
P4	学長挨拶
P5	特別座談会
P9	座談会①自治体勤務の卒業生
P15	座談会②金融機関勤務の卒業生
P21	卒業生インタビュー
P33	地域と歩んだ「標(しるべ)」
P45	釧路公立大学年表
P50	釧路公立大学名簿





釧路公立大学 校歌

作詞・作曲 ステファノ・木内

東に港あり

緑濃き海はるか

夕日に染まる街

庭なる釧路の

湿原に向かいて未来を祈る

おゝ 厚くとざす霧裂き昇る

舞う丹頂鶴あり

我等 釧路公大

阿寒の雪解けて

溢れゆく釧路川

川面に影映す

夢深き若人の

心は果てしなく広がるところ

おゝ 釧路原野の夜空にきらめく

群れ集う星あり

我等 釧路公大

荒れ狂う北の海

凍りつく湿地帯

窓辺に散る雪の

彼方にはの見える

光さす春の日の色鮮やかさ

おゝ 土の中より萌えいずる蕾に

決意の生命あり

我等 釧路公大

## 管理者挨拶



釧路公立大学事務組合管理者  
釧路市長

蝦名大也

昭和63年4月、釧路管内市町村で構成する一部事務組合方式により設置された釧路公立大学が今年、開学30年目を迎えました。この間、初代の高嶋正彦氏、荒又重雄氏、板本猛氏、小磯修二氏、そして、高野敏行氏と5代にわたる学長の卓越したリーダーシップの下、歴任教職員が三つの建学の理念を受け継ぎ、本学が地域の高等教育、さらには経済・社会の発展の原動力として大きな役割を果たしてきたことを誇りとするとところであります。

4年制大学では全国初の一部事務組合方式での設置という道なき道を拓かれた鰐淵俊之元釧路市長並びに管内町村長はじめ関係各位の先見の明とご尽力に改めて敬意を表するとともに、地域の財産として本学を温かく育んでいただいた管内住民の皆様のご支援・ご協力に深く感謝を申し上げる次第であります。

当初は経済学部経済学科のみ、入学定員250人の単科大学として開学いたしましたが、平成7年12月に開学時からの懸案であった経営学科増設が文部省に認められ、平成8年4月には入学定員経済学科200人・経営学科100人とする学科の増設を果たしました。

これまでの卒業生は7,518人を数え、全国各地において様々な分野で活躍し、就職活動を行う在学生にとって心強いOB・OGとして親身に対応いただいているところでもあります。また、本学入学者は総じて1割強が釧路管内から、5割強がその他北海道内からという実態にある中で、管内出身学生や学生生活を通じて地域に愛着を持った道内・道外出身学生を採用する地元企業が着実に増えており、有為な人材を地域に定着させることに寄与しているところであります。人材の養成を通じた地域とのつながりに加え、平成17年度から行っている附属図書館の地域住民への開放などはまさに建学の理念である「地域に結びつき開かれた大学」を実践したものと考えております。

さらには、平成11年6月に設置され地域課題についての共同研究プロジェクト等を行っている地域経済研究センターの取組や、各種ゼミナール活動で地域に飛び出して地域の人々と共に学ぶフィールドワークなどは、「地域に結びつき開かれた大学」と「理論と実践の相まった大学」の二つの理念を体現してきたものであります。

もう一つの理念である「国際性を重視する大学」につきましても、カナダのサイモンフレーザー大学との姉妹校提携、キャピラノ大学からの招聘教員による授業や派遣留学、韓国の牧園大学・ロシアのサハリン人文工業大学・台湾の明道大学との交換留学など、国際的な人材養成や交流にも努めているところであります。

また、就職支援等を強化するため、平成23年度から札幌市に、24年度から道外11拠点都市にサテライトスペースを設け、25年度には学内にキャリアセンターを開設し、専任のキャリアコンサルタントがサポートにあたっています。

今日の大学を取り巻く環境は、18歳人口の大幅な減少や大学入試制度改革、大学認証評価への適切な対応など多様な課題を抱えており、また、地方創生の施策展開などにおいては、公立大学をはじめとした高等教育機関の地域における積極的な関与が求められております。

開学から30年が経ち、卒業生が社会の中核を担う年代に差し掛かった今、本学の歩みを黎明期から成長期、成熟期へと転換していく時を迎えております。そうした中で、これまで本学の発展にご尽力いただいた多くの教員が退任を迎えつつあり、中堅・若手の教員を核に直面する課題に真摯に向き合い、本学の新たな歴史に足跡を刻んでいただくことに大きな期待を寄せるとともに、本学のさらなる発展に関係各位のより一層のご指導・ご協力をお願い申し上げ、開学30周年にあたっての挨拶といたします。

## 学長挨拶



釧路公立大学学長

高野敏行

「大学は昭和63年4月に開学したのだから、もう30年近くになりますね」ということを言われたのは昨年の初めころで、それも学内の人間からではなく近所の理髪店のご主人からでした。湿地を新たに造成したばかりの芦野の地にそのお店を開業したのが大学の開学と同じ年だったのでよく憶えているということ、以来いろいろあったということも話されました。それから私たち二人であの辺りはしばらくあとまで湿地だったとか、初めころやってきた学生の中にこんなのがいたとか、あんなのがいたという面白い話をしばらくしました。たしかに、大学も周辺の住人たちも、さらには土地そのものまでもがまっさらなかたちでスタートしたのでした。

釧路公立大学はここまでやってきました。その歩みは順調あるいは堅実といっぴよいと思っています。直接・間接に大学に関わり、支えてくださった皆様に感謝します。ありがとうございます。これからも、よろしくお願いします。

さて、この記念誌の話をしましょう。

どちらかというときちんとした形式というものを煙たがる私は、30周年ともなれば周年記念誌を作ることになるだろうなと少し重いものを感じていました。その時に考えていたのは、年表・資料・古い写真・たくさんの方の挨拶文などで出来上がっているよくある記念誌だったのです。ところが、私よりも若い世代から、「今回の記念誌は卒業生に焦点を当てて、釧路公立大学が人材育成というかたちで社会に広く貢献していることを知らせるものにしましょう」と提案されて、私は大いに喜びました。それを読みたいと思っている人はたくさんいるにちがいないと思えたからです。現に私自身も読んでみたいと思いましたし、楽しくそれを読んでいる人の笑顔がイメージできたのです。

かくいう私も蝦名管理者、2名の卒業生とともに座談会に参加しています。実際に少しだけ思い出話をしましたが、座談会の席に着いているあいだ、一つの思い出が次々に多くの思い出をつれてくるものだということ、しかもかなり自分勝手に修正しているようだという思いをもちました。さらに、自分の中にある大学にまつわる記憶のほとんどすべてが、まず何よりも人の顔、そのあとにその人と交わした言葉さらにはその場の景色という順序で浮かんでくることを知りました。自分にとっての釧路公立大学は、学生たち、先生たち、事務の人たち、一人一人との関わりの集合体なんだということを改めて実感し、幸せな気持ちになりました。

あいつ今頃はどんな顔つきになって、何をしているのだろうと思いつながらページを繰っているうちに開学間もないころの大学の様子やそこで話し、関わった多くの学生たち、先生たちの顔が、姿が心に浮かんでくるでしょうし、すぐにその彼らが現在それぞれの人生を歩んでいることに思い至って感慨を覚えることでしょう。自分の記憶を大幅に修正することになるかもしれません。めったにない読書(?)体験になりそうです。楽しくお読みください。